

岐阜大学教育学部附属小学校図画工作研究授業の考察

The Observation on Drawing and Craft Class

in the Elementary School attached to the Faculty of Education of Gifu University

野村幸弘 田村 健 高橋直子

岐阜大学教育学部附属小学校では、2018年6月23日に、「見方・考え方」を働かせて、学びを深める児童の育成をテーマに、中間研究報告会が開かれた。図画工作部では、それをふまえて「よさや美しさを捉え、表現に意味や価値をつくりだす児童の育成～ 造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを通して ～」をテーマに掲げ、1年生と4年生の2つの研究授業が行われた。

このテーマを設定した理由は、2017年6月に告示された「次期学習指導要領・図画工作科」改訂のポイントのひとつに、図画工作科における身につけたい力として、生活や社会の中にある形や色を「造形的な見方・考え方」を働かせながらそのよさや美しさを捉えるとともに、豊かな生活や社会を生み出そうとする態度を養うことが求められているからである。したがって研究授業では、身の周りの作品や材料、自然などから造形的なよさや美しさを見つけて味わい、自らも主体的に造形的なよさや美しさを生み出そうとする生き方づくりを実現していきたいと考えた。

前回の研究テーマである「納得できるまでつくり続け、つくり出す喜びを味わう児童の育成～造形的な見方・考え方を働かせた主体的・協働的な学び～」では、児童が他者や場所、材料などにかかわりながら、主体的・対話的で深い学びができるように、場の工夫や思考のプロセス等の工夫を行った。児童は、様々なものとかかわる中で自分にとって納得のいく表現を見つけ、つくり続けることができるようにはなったが、一方で、自分にとって表したいことが明確にならず、仲間の表現を真似しようとしたり、表したいことに向かって取り組んでいるが、どこをどのように表すとそれが実現できるのかを明確にできないといった課題も見つかった。

それを乗り越えるには、児童が表現に意味や価値をつくりだす「造形的な見方・考え方」を働かせることが必要である。「造形的な見方・考え方」を働かせながら、「よさや美しさ」を捉えることができれば、そこから自分の表したいものに合わせて、形や色を選択したり組み合わせたりし、自らの表現に価値や意味を生み出すことかできると考えた。そこから今回の「よさや美しさを捉え、表現に意味や価値をつくりだす児童の育成～ 造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを通して ～」というテーマを設定することになった。「よさや美しさを捉える」とは、造形的な視点をもとに、形や色などからよさや美しさを感じ取る営みのことであり、「表現に意味や価値をつくりだそうとする」とは、捉えたよさや美しさをもとに、自分の表したいことを思考・判断し、表現し続けていこうとする姿のことである。したがって、児童が身につける力として「造形的な見方・考え方を働かせながら、自分や仲間の表現から捉えたよさや美しさをもとに、自分の表したいことを思考・判断し、表現し続けていくことができる」とした。

「造形的な見方・考え方」

「造形的な見方・考え方」とは、「造形的な視点」によって捉えたよさや美しさをもとに、自分の表現に生かしたいことを思考・判断することである。まず造形遊びで制作した「木切れの表現【写真1】」を見ていただきたい。この表現から、よさや美しさを捉えようとするときに、どのような造形的視点があるのかを考えてみた。ここでは、木切れが並んでいる様子や、積み重ねられている形によさや美しさを感じ取れる。つまり「並べ方」や「積み方」が造形的な視点となる。このように表現を見る際の視点を整理して、次頁の【表1】のようにまとめてみた。そして造形的な視点を児童と教師が共有すれば、指導が明確になると考え、「造形的視点」を「図工の目」と言



写真1 木切れによる表現

換えてみた。

表現を見る際、そのよさや美しさをただたんに「きれいだな」「すごいな」といった簡単な形容詞で捉えるのではなく、もっと具体的に「丸く並べているところがきれいだな… (並べ方)」「だんだん小さくなっているところが面白いな… (大きさ)」とるように、造形的な視点によって捉えることが、自分の表現にもつながると考えた。造形的な視点によって捉えられるよさや美しさは個々の感性によるもので、多種多様であるべきである。しかし、教師が前もって造形的視点を整理しておくことで、児童の表現をすぐに価値づけ、指導の明確化に繋げることができるという大きなメリットもある。

そこで「造形的な視点」によって表現から捉えられるよさや美しさを整理し、題材計画に位置付けた。例えば、紙版画における表現にかかわるよさや美しさは、【表2】に整理してみた。

研究実践 1—図画工作科 1年生 「いろのリズムでてみ いろイロせかい」

授業者：高橋直子（岐阜大学教育学部附属小学校教諭）

研究内容（1）造形的な視点と捉えられるよさや美しさの整理

本題材は色セロハンを並べたり、重ねたりして、透明な色の美しさを感じるものである。学習指導要領の図画工作科第1学年及び第2学年のA表現の造形遊びをする活動である。

この時期の児童は進んで材料などに働きかけ、そこで見つけたことや感じたことを基にして思いを膨らませ、活動する姿が見られる。これまでに児童は、砂場でカップに砂を入れて形をとって「並べること」、形が多少異なるデザートのような容器を「並べたり」「積み上げたり」すること、色と大きさが異なる色画用紙を丸く切って「並べること」をしてきた。

このことから、身近な材料である折り紙を「並べる」という行為によって生み出される形の面白さや、色の並べ方の美しさに気づき、進んで材料に働きかけることができると思った。

新たに出会う材料の色セロハンは、光が当たり、色が透ける。この感じは、不透明と異なることや、「重ねる」ことで、色が変化する面白さを感じることができると思った【表3】。

研究内容（2）造形的な見方・考え方を働かせる深い学びの実践

①思考・判断の見通しをもつ導入

本題材での造形的な視点は、「並べる」と「重ねる」である。そのことに気づかせるための導入の流れは、以下のようになった。

T 前回の図工の授業では、みんなで切った沢山の丸をいっぱい並べましたね。

今日は、これを使います。（色セロハンを見せる。）

C 透けてる。

C きれい。

T これを「色セロハン」と言います。前と違って、透けているね。このセロハンをボードに当てて、くるくる魔法をかけると…くっつきます！

C おお～！

造形的視点	図工の目
質感	さわった感じ
量感	ボリューム
並べ方	並べ方
積み方	積み方
重なり	重なり
大小	大きさ
ムーブメント	動き

【表1】「造形的視点」と「図工の目」

造形的視点 (図工の目)	捉えられるよさや美しさ
質 感 (さわった感じ)	とげとげ でこぼこ がさがさ さらさら ざらざら つるつる すべすべ くしゃくしゃ ちくちく
並 べ 方 (並 べ 方)	交互に ばらばらに だんだん大きく だんだん小さく 向きを揃えて 向きを変えて

【表2】 造形的な視点と捉えられるよさや美しさの例

並べる	重ねる
斜めに並べる (直線)	同じ色を重ねる (色の濃さ)
丸く並べる (曲線)	違う色を重ねる (色の変化)
色を変えて並べる	違う大きさの形を重ねる
大・中・小の形の組み合わせの違いで、遠近感を出す (徐々に小さく、大きく)	重ねる面積を考える

【表3】 造形的視点「並べ方」「重ねる」

C どんどんくっつけていくんや。

T 次は、どの色にしようかな。青色が好きだから、青色をここに置こうかな。

(少し離して、斜めに置く。)

T 三つ目はどこに置こうかな？やってみたい人いますか？形が違うものもあるよ。

(一人当てて、小丸をボードにつける。)

T どのように置きましたか？

C ちょっと斜めに置きました。

T なるほどね。形も変えて、斜めに置いたんだね。もう一つだけ置いてみようかな。

(一人当てて、中丸をボードにつける。)

T どのように置きましたか？

C 中くらいの丸を近くに置きました。

T 中くらいの丸を反対に並べたね。丸が繋がって、尖ったような形になったね。

T 次は、この大きい丸を近づけてみようかな。どんどん近づけると…。

C くっついた。

T まだまだ近づけるよ。

C 重なった。

C 色が変わった。

T 先生は、今何をしたかな？

C 重ねた。色が重なった。

T 今日、みんながやってくれたように、並べたり、重ねたりして、どんなことができるか、沢山試してみよう。(課題化) 【写真2】



【写真2】 課題化のときの様子

「何をつくるか」ではなく、「どのようにしたか」という試した行為の過程を大切に。また、児童の並べ方や重ね方について、事実を認めた後に、「どんな並べ方」だったのかをかみ砕いて、造形的な見方・考え方を確認した後に、活動をさせていた。

よさや美しさは、並べる行為や作品を見る角度などをもとに、価値付けをしていく。

「ここから見ると、ギザギザに並んでいて、迫力があるね。」(直線並べ)

「青色と紫色を重ねると、こい色になったね。」(色の変化)

「真ん中からくるくる並べると、渦巻きのように見えるね。」(曲線並べ)

「仲間のセロハンと重なると、形の大きさが変わって、跳ねているように見えるね。」(形の遠近感)

②表したいことに向かって思考・判断し、表現し続けるための展開

本時では、新たな造形的な視点に気づくために、立てて並べることができるものや、仲間の作品を自然に鑑賞する場を設定している。環境は、一人一枚のボードを繋げ、四角い形にして立てている。これまでの造形遊びの活動では、場所を区切ることなく活動していたため、誰かと一緒になって制作をする児童もいた。中には、仲間と活動することで安心感が生まれ、仲間の提案をそのまま受け入れ、自分の表現ができずにいる児童がいた。今回は、仲間に頼ることなく、個人の活動場所が確保できるようにした【写

【写真3】。また、色セロハンは、最初は10枚ほど、個人のお皿に入れてあるが、使用するうちに、枚数が不足してくる。制作の途中で、セロハンを前に取りに来るような場をあえて設定した【写真4】。そうすることで、自分の制作場所から一旦離れ、客観的に見る事ができる。また、仲間の作品も自然と目に入ってきて、「次は、あの並べ方してみようかな」と新たな視点に気付いて、表現し続けることに繋がると考えた。

【写真5】は、仲間の作品を見合っている様子である。右の男児が、並べた丸が下の方に下がって、斜めになったことについて話している。その事を面白いと感じた左の女児は、何枚かセロハンを並べて、自然に下がった面白さをまた、他の児童に見せていた。このように、気軽に互いの作品を見られる環境は、すぐに試すという効果があったといえる。

展開途中では、児童のつぶやきや、気に入った並べ方を途中で共感しながら、新しい並べ方を工夫できるような声かけをした。教師がどんな声かけをするとよいのか例を挙げる。

「どんなことを考えながら並べたの」
 「大きさの違う形を並べてみると、どうなるのかな？」
 「同じ形で並べると、どうなるのかな？」

実際に児童の制作から見つけた「造形的な視点」は、【表4】のようになっている。児童は、活動する中で、様々なことを教師に話しかけてくる。その時、児童に話したことを以下に示そう。

(1) 「花のように」並べた児童に対する教師の声かけ【写真6】

C 並べていったら、花ができたよ！
 T どうやってできたの？
 C 真ん中に一枚置いて、その周りに同じ色を置いていったよ。
 T 一つの丸の周りに、少し重ねて、周りに並べているんだね。

(2) 形の大きさの違いを生かして規則的に並べている児童に対する教師の声かけ【写真7】

C どんどんいろんな形を並べたよ。
 T 並べて、どんなところが楽しかった？
 C 大きい形と小さい形で繋げていったところが、楽しかったよ。
 T 大きい形、中くらいの形、小さい形って、違う形を繰り返して並べているね。

この後は、どうなっていくの？
 C 道みたいになっているから、どんどん下に繋げていくよ。
 T 楽しみだね。また見せてね。
 C 全部重ねると、キラキラした色になったよ。→ T たくさん重ねているんな色ができたね。
 C ここにダイヤみたいな形ができたよ。→ T 重なってできた形が、丸と違って見えて面白いね。

このように、教師は「何を作ったのか」を価値付けるのではなく、どん



【写真3】 教室の環境



【写真4】 セロハンを選びに来る児童



【写真5】 仲間の作品を見ている様子

造形的視点	実際の児童の制作から見つけたもの
並べ方	まっすぐ 曲げる 丸く 大きい形の周りに小さい形 大中小 大小大小 左右対称(シンメトリー) 大きい形から徐々に小さい形に変化させて丸く並べる 同色系、補色など対称的な色
重なり	2色以上で変化 同じ色で濃さの違い 大のなかに中 大のなかに小 少しずつ重ねる 重ねてできた形の面白さ(ダイヤ、楕円形) 大と大の間に中のように接続の意味を持った重ね方

【表4】 造形的視点「並べ方」「重なり」

な行為をしたのかを児童の発言の中や、活動の跡から探り、その価値付けをしていく。「花のように」なったり、「人の顔のように」なったり、見立てをして制作している児童がいる。その時、「造形的な視点」である「並べる」「重ねる」という言葉を使って、行為の価値付けをすることで、その後の行為が広がると考える。

研究の成果と今後の課題

<成果>

○材料を生かして、「並べる」の他に「重ねる」を造形的な視点にしたことで、児童は、これまでの学習に新しい視点が出たので、そのことを楽しみながら、取り組むことができた。(研究内容1)

○透明セロハンを重ねて光に当てて、透過性や色の「重なり」を楽しんで見ていたので、材料は児童にとって親しみのあるものになっていた。

○導入では、具体的にどのように制作をすると良いのか、一緒に考えていくことで、造形あそびの方法が分かった。(研究内容2)

○何を作るのかではなく、制作過程について聞き、その行為を価値付けることで、授業の終末で、どんなことを頑張ったか問うと、「並べた方」や「重ね方」について発言することができた。(研究内容2)

○個々の制作スペースを作ったことや、仲間の作品を気軽に見ることができ環境を作ったことで、自分の制作に広がりをもつことができた。(研究内容2)

<課題>

●造形的な視点の中に、色と形が含まれていた。1年生の発達段階を考慮すると、まだ形だけに視点を絞って取り組める題材にした方が良かった。例えば、白黒で丸を並べたらどんなことができるだろうか。など(研究内容1)

●静電気が発生しにくいものが多かったので、その途中の手立てが必要だった。(雑巾や霧吹きなど)

●静電気によるくっつきが弱いことから、できたものが崩れてしまうことがあり、児童の意欲が低下しているように感じた。

●床に貼っても良い環境を整えることがあっても良かった。(床に白い画用紙などを貼っておく)

●終末では、移動して鑑賞をすることは、やや困難だった。大型テレビに作品を映し出して、移動しなくても、じっくり鑑賞ができるようにすると良かった。

研究実践2 一図画工作科4年生 「ふぞくの森のひみつ木地」

授業者：田村健（岐阜大学教育学部附属小学校教諭）

題材観

学習指導要領のA表現(1)イの指導内容には「表したいことや用途などを考え、形や色、材料などを活かしながら、どのように表すか考えること」とある。本題材では、本校4年生の経営活動「動物経営」との関連に着目し、題材を設定した。児童たちは、毎日にわとりとかかわりながら、「もっと居心地のよい」「好きになってくれるような」と、飼育場所やふれあう空間について考えている。その願いをもとに、主に木や枝、土など自然



【写真6】「花のように」並べた児童に対する教師の声かけ



【写真7】形の大きさの違いを生かして規則的に並べている児童に対する教師の声かけ

の材料を活用して「にわとりたちが遊べるひみつ木地」を表していく。また、関連する題材で行なった、木の枝や木切れを並べたり、組み合わせたりする造形遊びの中で分かった「造形的な視点」をもとに、「〇〇のように並べると～な感じがする」、「～にするために□□の表し方をしてみよう」と、捉えたよさや面白さを生かして、自分の表したいことを表現できるようにしたい。

研究内容 (1) 「造形的な視点」と捉えられるよさや美しさの整理

本時では、【表 5】の造形的な視点とよさによって、自分や仲間などの表現をみつめたり、表したいことを実現するための方法を思考・判断したりできるように整理した。

造形的視点	捉えられるよさや美しさ
高さ	だんだん高く だんだん低く 高さをそろえて 上から 下から 差をつけて
空間	形 (三角の、四角の) 狭い (小さい) 広い (大きい)

【表 5】 造形的視点「高さ」「空間」

研究内容 (2) 造形的な見方・考え方を働かせる深い学びの実際

①思考・判断の見通しをもつ導入

授業の導入では、教師の試作資料を提示しながら、「先生の制作の願いは〇〇なんだけれど、どこに着目しながらつくとよさそうかな？」と問いかけることで、「図工の目」として造形的な視点の2つを児童の発言から引き出し、位置付けることができた。児童に表したいことを問う場面や、児童同士で表現の見通しを話し合う場面において、以下のような発言があった。

「僕はこの上の空間から下のこの隙間につながる道をつけたいです。そのために木の枝をはしごのようにしてつくりたいです。」【写真 8】

これらは「図工の目」として提示された視点によって、自分の表したいことにあった表現の方法を思考したり、判断したりしようとする姿と言える。導入では以下のような提示を行なった。【写真 9】



【写真 8】



【写真 9】

T 4-2のみんなで遊べるひみつ木地にしたい、という表したいことを実現するには、どこをどんな風に工夫するとよいかな？

A この下の方に空間があるから、雨の下にいっぱい木の板をつけて、雨宿りができるようにしたらいいと思う。

T Aさんの今の考えは、先生の表したいことのどれを実現しようとするの？

C 「4-2のみんな」というところじゃないかな。

T 下の方の空間を使って、みんなで雨宿りできるって、そういうことか。よし、やってみるよ。」

(実際に試してつけてみる)

T なるほど、これもいいね。他にも考えある？

B 上の方に麻ヒモとかで巻いて、下の方にやって、高いところになんか、ヒモから登っていける感じにしたらどうかな。

T ここから麻紐を垂らして・・・。

B もうちょっと上の空間から下の隙間につなぐの。

T こころに登れていないから、「高いところに行きたい」という先生の願いを考えると、上と下の空間をそうやってつなぐ、ということね。

(実際にやってみせる)

T なるほど、表したい感じに近くなったなあ。ありがとう。じゃあ、あ



【写真 10】



【写真 11】

なたたちのひみつ木地をつくっていく時に、どんな視点で見たり考えたりしていくとよいかな？」

このやり取りの中で、「図工の目」として造形的な視点を明らかにした。その後の児童同士の交流では、視点を使いながら、「ここの上に空間があるから、遊んでいる人が休めるところをつくった方が、表したいことにあっているんじゃない」と、見通しをもちながら対話する姿が多くみられた【写真10】。

②表したいことに向かって思考・判断し、表現し続けるための展開

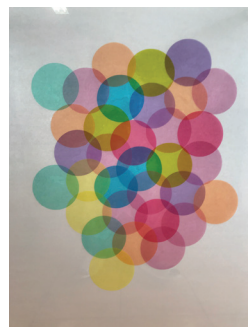
この題材では、児童が思考・判断し、表現し続けるための展開として、以下の点を工夫した。

木の枝や木切れを試しながら接着できるように、作品の土台部分にスポンジ素材（スタイロフォーム）を使用し、枝を差したり抜いたりしやすいようにした。また、材料の接着には、木工用ボンドの他に、麻紐、ホットボンド（グルーガン）を使用した【写真11】。表したいことに合わなかった時に、すぐに取り外したり、付け替えたりすることができるようにするためである。児童は、様々な方法や材料を試しながら自分の表したいことにあった表現をつくり、つくりかえ、つくり続けることができた。

生徒作品の分析と講評

小学校第1学年の図画工作「いろのリズムでいろせかい」は、大きさの異なる円形の色セロハンをどのように並べれば、美しい画面が出来上がるのか。その並べ方、重ね方を工夫する「造形遊び」の題材である。出来上がった生徒作品を見ると、4つほどの類型を認めることができた。

I. 同じ大きさの色セロハンを几帳面にできるだけ均等に重ね合わせて、全体の図形も円形にまとめようとした作品【図I】。



【図 I】

II. 大小の色セロハンを交互にバランスよく取り混ぜながら画面を埋め尽くそうとした作品【図II】。



【図 II】

III. 色セロハンを曲線状に並べて、動きやリズムを表そうとした作品【図III】。



【図 III】

IV. 大小の色セロハンをランダムに並べたもの【図IV】。



【図 IV】

いずれも「楽しんで取り組み続けることができる」という目標は達成できたと考えられる。I～IIIは、暖色系と寒色系の色彩を交互に並べて、美しく華やかな画面を作っており、「形

や色の並べ方、重ね方を思いつく」という目標に関して、均等、バランス、連鎖というように、それぞれ工夫されていることが分かる。

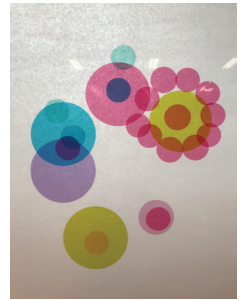
一方で、花や動物のぬいぐるみに見立てたような並べ方をした作品がいくつかあった【図 V】。それらは抽象的な形態を使って、具象的な形を作る意思があることを示している。題材の目標にはないが、児童が具象的な形を生み出そうとするのは、自然なことだと考えられる。というのも抽象的な表現は、高度な芸術思考から生まれ、20世紀初頭のヨーロッパ絵画にはじめて現れたものだからである。

たとえばワシリー・カンディンスキーの《さまざまな円》【右上図】は、大きさの異なる多彩色の円を複雑に組み合わせた作品であり、純粋な幾何学形態による抽象絵画である。しかしカンディンスキーは、まず具象画から出発し、それを徐々に抽象化して行った過程があり、そこには具象の名残りが存在する。つまり抽象表現は、形と色によって純粋な美を作り出す喜びのうちに、じつは重要なテーマを潜ませている。カンディンスキーの《さまざまな円》は、一見、純粋な幾何学的抽象表現ではあるが、同時に、これはどこか宇宙の惑星の運行といったイメージを表しているようにも見えるのである。そういう意味で、この「造形遊び」の題材は、形と色を並べたり重ねたりする以上の高度な内容をもっていると言することができる。

ただこの題材の興味深い点は、支持体にアクリル板を用い、そこに光を透過する色セロハンを貼るというアイデアである。というのも、色セロハンの並べ方にとくに工夫がなくても、そこに背後の風景が映り込み、その組み合わせによって、予期しない画面が出来上がるからである【図 VI・VII】。ここには、小学校の教室の、初夏の爽やかな朝の情景が、モノクロの映像と色セロハンのアクセントによって詩的に映し出されているのである。

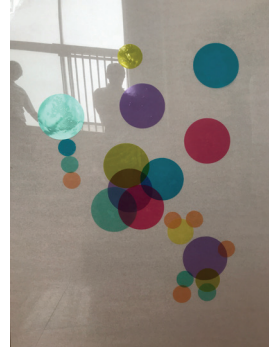
小学校第4学年の図画工作「ふぞくの森のひみつ木地」は、木の枝をひもや接着剤でつなぎ合わせて、立体的な空間表現を行う「工作」の題材である。完成した生徒作品は、以下のように、大きく3つの特徴に分けることができるだろう。

A. 木の枝を三角形に組んで安定させ、そこに梯子やぶらんこを掛け、秘密基地らしく作っている作品【図 A-1・A-2】。題材の評価基準にある「用具の適切な使い方」、「バランスのよいつなぎ方」「空間の生かし方」がきちんと達成できている。これらは、おそらく授業者による参考作品を手本にした、いわゆる模範的な作品かもしれないが、それでも、長い梯子と短い梯子を作り分けたり【図 A-3】、頭頂部に踏み段をつけて、どこにも辿り着けない梯子を作ったり【図 A-4】、交差させたV字状の部分楽器のようなものに変え、白い綿を載せて雪のよ



カンディンスキー《さまざまな円》1926年 ニューヨーク
グッゲンハイム美術館

【図 V】



【図 VI】

【図 VII】



【図 A-1】

【図 A-2】



【図 A-3】

【図 A-4】

【図 A-5】

うに見せたり【図 A-5】、授業者の指導とは考えられない工夫も随所に認められる。

B. 三角形構造を作っているが、左右どちらかに傾きすぎて、木の枝が台座の箱から大きくはみ出したり【図 B-1】、さまざまな材料が無秩序に組み合わせられてやや乱雑な印象を与えている【図 B-2】作品。これらは授業者の参考作品を目指そうとはしたもの、おそらく思うように木の枝などのパーツをうまく組み合わせることができなかつたと考えられる。とはいえ、A の作品以上に高さを追求したり【図 B-3・B-4】、箱型の部屋を作ったり【図 B-5】、枯れ木をあしらったり【図 B-6】、模範的な作品にはないアイデアが見られる。

C. 授業者が示した「ひみつ木地」のイメージとは異なり、A・B の作品群と共通する部分が少ない作品。

【図 C-1】は、たった7本の繊細な枝を組み合わせ、まるで釣り竿のように斜めに流し、アレクサンダー・カルダーのモビールのような、はかなく不安定なバランスを保っている。

【図 C-2】は、反対に、太い枝を6本、まるで櫓のように骨太に組み、非常にすっきりとしたシンプルで力強い造形性を示している。

【図 C-3】は、細い枝に4つのぶらんこが舞い上がり、軽やかなリズム感を生み出している。また地面には十字型にした木の枝が立てられており、おそらくこれはお墓だと考えられる。

【図 C-4】は、ひもを木の枝を結わえたりぶらんこをぶら下げたりするために使わず、木の枝と同じように扱っているところが独特である。

【図 C-5】は、いちおう、枝をクロスさせて三角形を作っているのだが、3本目の枝を中央ではなく外側に向け、構築を目指していない点と、木の板を地面に敷いたり、立て掛けたりしている点が目を惹く。

【図 C-6】は、3本の枝を交差させた部分と、その左にもうひとつ別の構築物を作っており、ひとつにまとめていない点が、ほかの作品と異なっている。

【図 C-7】は、枯れた木立のなかの廃屋を表しているように見え、ぶらんこらしきものも箱の外側の地面より下まで垂れ下がっていて、寂寞とした冬の風景を思わせる。作者にそのような表現意図があったかどうかは別として、叙景詩を視覚化したような味わい深い作品となっている。

このように、C の作品群は、授業者の意図に反して、秘密基地とは異なるイメージを持ちながら制作したと思われる。

「ふぞくの森のひみつ木地」という題材は、木の枝や板をひもと接着剤で好きなようにつないでいるうちに、自律的に面白い形に「成長」し、かならずしも授業のテーマにしばられないところが魅力的である。完成したものが「ひみつ木地」ではなくても、題材の目標である「バランスのよいつなぎ方」や「空間の生かし方」が、生徒のアイデアによって十分、実現し、それによって現代アートのインスタレーションのような表現となっているからである。



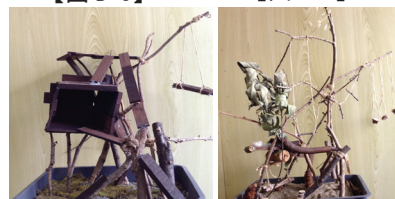
【図 B-1】

【図 B-2】



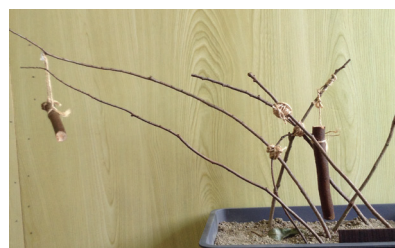
【図 B-3】

【図 B-4】



【図 B-5】

【図 B-6】

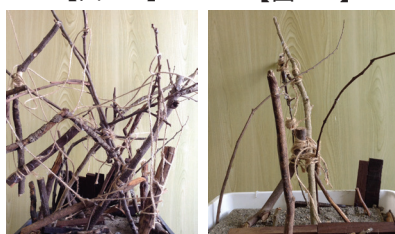


【図 C-1】



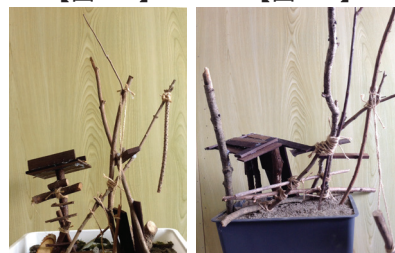
【図 C-2】

【図 C-3】



【図 C-4】

【図 C-5】



【図 C-6】

【図 C-7】

